

論文題名：30 歳代大卒未婚男性の結婚に関する意識及び行動の構造

(サンジュツサイダイダイソツミコンダンセイノケツコンニカンスルイシキオヨビコウドウノコウゾウ)

論文副題：「適当な相手」の基準とは (「テキトウナアイト」ノキジュントハ)

主査教員名：西野 理子

研究科・専攻・学年：社会学研究科 社会学専攻 博士前期課程 2 年

(アカイ ソノエ)

氏名： 赤井 そのゑ

日本における結婚適齢期男女の約 9 割は結婚願望をもっているが、なかなか結婚に結びつかない。その理由として、「適当な相手」がないことが指摘されている。では、その「適当な相手」の基準とは何か。同類婚の法則や経済条件が指摘されているものの、「適当」の内実を厳密に検討しようとする研究は、これまでほとんどされてこなかった。

本研究は首都圏に住む、30 歳代大卒で正規社員の未婚男性、いうならば結婚条件として大変恵まれている上位階層にいる未婚男性の結婚意識と結婚行動を明らかにする。これまでの先行研究から男性が「適当な相手」として求める女性像は、①美人でかわいい女らしい女性、②家事・育児能力という性別役割分業意識のある女性、③出しゃばらない控えめな女性、④価値観が一致していること、⑤恋愛志向であること、⑥学歴同等程度、家柄も同等程度、⑦年齢は 30 歳くらいまでであり、⑧適当な相手の条件を満たせば結婚を決断することが仮説として構成される。これら 8 つの仮説を検証し「適当な相手」という「個人的な価値観や基準」、そして「結婚行動特性」の構造を明らかにすることが課題である。

本研究の目的：

1. どのような基準や条件を整えば、30 歳代大卒未婚男性は結婚を決断しようと考えているのか。「適当な相手」という個人的な価値観や基準を明らかにする。
2. 「適当な相手」の条件はどのようなプロセスで充足されたりされなかつたりするのか。「結婚への意識や行動プロセス」の構造を明らかにする。

研究の方法：研究デザインは、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(M-GTA) による質的記述研究である。半構造化された調査票を用いて詳細な質的インタビュー調査を行い、得られたデータを M-GTA 法を用いて分析した。調査対象者は、スノーボールサンプリング方式で有意抽出した。

分析の結果：インタビューデータの内容から M-GTA 法を用いてカテゴリーを析出し統合した結果、「ライフコース」や「結婚願望」「子ども願望」「結婚決断」、そして「適当な相手」の基準について「ライフコース、安定志向と楽しさ選択から自分の身の丈に合ったほどほどの夢の実現にたどり着く」「結婚限界年齢と子ども願望の一致という 30 歳・35 歳年齢意識が形成される」「過去の恋愛経験の失敗、別れた理由などからの学習によって楽な関係という『適当な相手』の基準が形成される」「経済的安定を背景に、35 歳までに結婚を決断しようと考えている」「積み込み過ぎの『適当な相手』の基準に折り合いを着けて、ほどほどの基準選択で楽な関係の結婚という夢を実現する」という結婚への促進に繋がるストーリーラインを析出できた。また反対要因を検討した結果、「ライフコース、人生目標の混乱が収まるまで結婚を先延ばしするか結婚を諦めるという阻害が起きる」「結婚へのマイナス情報が結婚への消極的姿勢に繋がり、弱い結婚願望・弱い子ども願望となり結婚への阻害が起きる」「結婚への過大評価・結婚リスクの過大評価・理想への執着が結婚を躊躇する意識に繋がり結婚への阻害が起きる」「結婚リスクの回避・拘る生きる意味・理想への執着など、拘り過ぎる意識も現実的選択を困難にして結婚への阻害が起きる」「積み込み過ぎの『適当な相手』の基準と理

想への執着は、やがて基準不明確という混乱に陥り結婚への阻害が起きる」という結婚阻害へ繋がるストーリーラインも析出できた。

以上の結果を考察検討した結果、仮説の②④⑤は検証されたが、③⑥⑦⑧は仮説と異なる結果が得られた。仮説①は検証されたが、仮説で想定されていた以上に重要視されており、結婚の土台となる規準となっていることがわかった。

結論：検討を重ねた結果導き出された「適当な相手」の基準は、以下のとおりである。

<「適当な相手」の基準>

1. 「外見重視」「上下という女性評価」という基準をもっており、容姿が決定的に重要。
 2. 「価値観の一致」「生活感覚の一致」「同質性」を内包した、「楽な関係」という基準。
 3. 学歴・出自・年齢には拘らない意識を持つが、子どもへ影響するリスクを避けようとする「結婚リスクの見極めと回避」という基準。
 4. 再婚子連れや、女性の処女性に拘らない基準。
 5. 「結婚＝理想的な子どもがいる生活」、正常な子どもが生まれ理想的に育つ願望基準。
 6. 育児能力・料理を中心にした家事能力が期待できる女性という、専業主婦の母モデルを土台とした「性別役割分業意識志向」基準
 7. 「男性稼ぎ手」意識が変化している。経済的なリスクから経済的に支えてくれる妻という「妻の経済力重視」の基準。
 8. 「自己主張の明確な女性」「働く女性」という生きがいを持ち、自立した行動的な女性と共に支え合い協力しながら生きていく「新しい結婚スタイル」が可能な女性という基準。
- また、結婚への願望と決断の両面において、以下の構造があることが発見された。

<「結婚願望」「子ども願望」形成過程>

9. 幸せな「定位家族モデル」から、「強い結婚願望」「強い子ども願望」を形成する。
10. 「具体的な結婚願望」は、大学時代の恋愛経験を経て徐々に形成される。女性とのコミュニケーション能力が養われ、自分に合う「適当な相手」基準が形成される。
11. 「結婚限界年齢と子ども願望の一致」により形成される、内発的動機づけによる自分自身の「30歳・35歳年齢意識」という「結婚適齢期」意識を形成する。

<結婚決断>

12. 「適当な相手」基準が整っただけでは決断せず、「35歳年齢意識」「経済的安定」「結婚のプラスイメージ」という促進要素の後押しがあって決断に至る。
13. 拘り積み込み過ぎの「適当な相手」基準に折り合いをつける「分相応」という発想転換をすることで結婚に至る。

なお、M-GTA法では促進の反対要因も検討した結果、結婚に至らない構造も指摘された。

<結婚阻害>

14. いじめなどの「自己否定体験」、マイナスな「定位家族モデル」、「リスクの過大評価」「結婚への過大評価」も結婚阻害を起こすプロセスとなる。

結婚したい「適当な相手」は自明に思いがちだが、M-GTA法を用いて詳細インタビューデータを検討することにより、仮説とは異なる知見を呈示するだけでなく、相手を思念するときの複雑な思いや、決断に至らない紆余曲折を論理的に理解し呈示することができた。

本論はあくまで恵まれた若者のみをとりに上げたものであるが、配偶者選択領域の研究に一矢を投じたものである。今後将来的には、本研究が「結婚教育」というかたちでキャリア教育や社会人教育の場に生かされ役立つようになればと望むものである。